

# わたし、塀の中の懲りない訳者です



## 東江一紀

日十二、三時間働いて、ようやく達成できる数字なのだ。

どれかあと回しにできないかと考えてみたが、六冊とも、もうぎりぎりのところまで来ている。いや、それより、すでにあと回しにしている本が、ほかに七、八冊ある。

どれか放り出せないかとも考えてみたが、六冊とも、おっかない取り立て人、じゃない、編集者がにらんでいる。それに、放り出せる本はすでに全部放り出してしまった。

八方ふさがりが六冊で、四十八方ふさがり。できてもできなくても、こりやもう、やるしかない。だいたい、わたし、こういう状況のときに、腰を引くよりは、アドレナリンをたぎらせるたちなんです。もしかすると、単に腰がぬけて、座り小便しているだけかもしれないが……。

というわけで、一念発起、一意専心、猪突猛進、乾坤一擲、委細面談、地獄のワーカホリックライクチックフルネスリー生活に突入する決意を固めました。七か月間、わき目もふらずに働きまくるのだ。言うなれば、長期ひとり合宿。執行猶予なしの自主懲役。

現在、その刑期を二か月半ほど務め、一冊めのリーガル・サスペンス千六百枚をかたづけて、二冊めの第十九章を訳しているところ。それがつまり、地獄の二丁目十九番地と

わたし、今、地獄の二丁目にいる。

二丁目十九番地。

二丁目が三十四番地まであって、地獄は六丁目まで続く。

いえ、いえ、ダンテ描くところの高尚な地獄などではなくて、ただの締切り地獄です。諸々の事情が重なり、この二月から八月まで

の七か月間に、ミステリー四冊、ノンフィク

ション二冊、それも長めのやつばかりで、四百字詰め原稿用紙に換算して総計七千枚弱、翻訳しなくてはいけないはめになった。

月千枚です。むちゃだよなあ。たぶん平均が、まあ月産二百枚から三百枚というところで、それだって、土日も祭日も休まず、一

いうことでして、いやはや、長ったらしい説明でごめんなさい。果たして、わたしは六丁目まで行き着けるのでしょうか。

最初の一、二週間はつらかったですねえ。

もともとが、年中無休、朝から晩まで営業、「あいててよかった」のコンビニエンス就労体制をとっていたわたしなので、それ以上働こうにも、労働時間の「予備」がほとんどない。泣く泣く、就寝前の読書時間をそっくり仕事時間に替えました。本を読むのだから、半分以上は仕事なのに、それでもできなくなるとは情けないよなあ。それから、週三回の水泳もやめてしまいました。ついには、散歩さえしなくなりました。必然的に、散歩の目的の九十七・五パーセントを占めていたパチンコも、ふつつりやめちまった。

あとはもう、やけです。飲み会の誘いも全部断り、大事なパーティーもすっぱかし、親の死にも会えず（これはまあ、親がまだ生きているという事情に負うところが大きい）、日がな第二サティアンに引きこもつて、翻訳出版界の雲隠れ尊師と呼ばれるまでになった（うそ、うそ）。

そんな自主懲役生活で、今、何を翻訳しているかといえば、これがなんと、洒落にもならない、プリズン・サスペンス。

そう、光を当てると七色の虹ができちゃう

あれですね、って、違う、違う、それはプリズムでしょうが（自分でボケて、自分でツッコむのって、すごくむなし）。

そうじゃなくて、箱根は奥湯本にあるという『プリズン・ホテル』（行って見たことはないけど）のプリズンです。「巢鴨プリズン」のプリズンと言ったほうが、わかりやすいか。つまり、刑務所。テキサス州にある二千五百名収容の大刑務所で、囚人が暴動を起こすってお話だ。

二年前の『ストーン・シティ』で罵詈雑言を浴びながら、またまた刑務所小説を引き受けるなんて、わたしはほんと、塀の中の懲りない記者ですね。刑務所の何が、わたしを引きつけるのか。というより、わたしのどこが、刑務所を引き寄せてしまうのか……。

グリシャムの『処刑室』に刑務所が出てきたときも、読んでてふるさとに帰ったような気になりました。ところで、『処刑室』で、白石朗さんは「舎房」という訳語を使っている。原語は“cell”じゃないかと思うのだが、「舎房」って、なかなか雰囲気出てるよなあ。

でも、手もとの国語辞典には、そういう見出し語がなくて、わたしは今のところ、『監房』で通している。今度白石さんに会ったら、出処をきいてみよう。

アメリカの刑務所というのは、しかし、す

ごいところだ。ほとんど自治体ですもの。安部譲二さんがカリフォルニアの州立刑務所に体験入所した『懲役の達人』という迫力満点のドキュメント本があるが、それを読んで、あちらの小説に出てくる刑務所がけっして作り物じゃないことがわかる。

看守と囚人は、単に立場というか、役目が違うだけで、基本的に対等の関係にあるらしい。だから、囚人がやたら自己主張するのは、死刑が廃止になった州では、当然、終身刑囚が多くなるから、仲間どうし「クラブ」を作って、長い余生を退屈せずに過ごすためのさまざまな権利を確保しようとする。

財力のある囚人は、広い監房を買い取ったり、改装したりすることもできるようだ。囚人間の結婚や養子縁組（もちろん、男と男）もある。所内で造られた地酒や地菓子（？）で、パーティーが行なわれたりもする。娑婆では、家族制度とか社交とかに縁がなかった犯罪者たちが、ここでは割と安定した社会を営んでしまうのだ。

わたし、ふと思うのだが、そういう「開かれた」刑務所なら、ワープロの持ち込みも許されるのではないだろうか。それに、編集者からの電話もかかってこないだろうし……。なんだか危ない心境のきょうこのごろでござんす。